＜オリエンテーション＞

**Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――古代から宗教改革**

**Ｂ．目的**

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生を対象にしている。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

**Ｃ．内容**

本講義では、前期後期ともに、まず、10 回程度の講義を行い、残り 5 回の授業において、受講者の研究発表を実施する。キリスト教学専修学部生（研究生も含めて）に対しては、この研究発表によって、卒論指導を行う。

今年度の前期のテーマは、古代キリスト教思想研究である。キリスト教の誕生と制度化（初期キリスト教)、初期カトリシズム、ヘレニズム世界のユダヤ教、グノーシス主義、キリスト教教父、基本教理の形成、ローマ帝国国教化などについて、現在の研究状況を概説する。

後期のテーマは、中世キリスト教思想（宗教改革を含む）である。西方キリスト教会のゲルマン民族への浸透、修道制の展開、スコラ的文化総合、自然神学、都市の発展と十字軍、12 世紀ルネサンスなど。

**Ｄ．確認事項**

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（一部、レポートに代えることも可能)。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金３・４）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うこと。

**Ｅ．授業スケジュール**

**前期：初期キリスト教から古代キリスト教**

**後期：古代キリスト教から中世、そして宗教改革**

| | |
|---|---|
| オリエンテーション | 9/29 |
| １．ゲルマン民族とキリスト教 | 10/6 |
| ２．キリスト教修道制 | 10/13 |
| ３．中世キリスト教世界のダイナミズム | 10/20 |
| ４．キリストと文化――スコラ的文化総合 | 10/27 |
| ５．自然神学の諸問題 | 11/10 |
| ６．研究発表 | 11/17 |
| ７．研究発表 | 11/24 |
| ８．研究発表 | 12/1 |
| ９．研究発表 | 12/8 |
| １０．イスラームと１２世紀ルネサンス | 12/15 |
| １１．フィオーレのヨアキムと歴史神学 | 12/22 |

１３．中世都市と民衆の宗教性　1/12
１４．宗教改革と近代世界　1/19

＜中世キリスト教と宗教改革＞
１．佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世１）岩波書店、2008年。
「ローマ帝国を「中心」とする古ヨーロッパ・システムの「周縁」」（12）
「ヨーロッパの中世の歴史は、古ヨーロッパ・システムの中での「中心」からの転落に始まる「半周縁化」からの再生の歴史とも読める」「六世紀から八世紀のヨーロッパの時代相は、社会、経済、文化、どの面をとっても著しく「縮み」指向が際立っており、農業の生産性は低く、ローマ帝国時代にストックした金をはじめとする財貨は、たえず東方に流出した」（13）
「こうした局面は八世紀の後半から変化を見せはじめる」、「ひとつにはヨーロッパ内部での農業成長」、「七六二年のアッバース朝の首都バグダッドの出現」（14）
「オスマン・トルコ」
「ヨーロッパ史の「中世」は、ヨーロッパ半島が回廊地帯であることをやめた段階で終焉を迎えたと言い換えることができるだろう」、「長く西ヨーロッパを「中心」たらしめていた「ギリシア・ローマ帝国」がゲルマン民族に倒され、今度は勝利したゲルマン人を盟主としてこの世界が歴史を歩みはじめたとき、この世界は東地中海をシステム上の「中心」とする「半周縁」とも言うべきポジションにおかれることになった。「半周縁」からの出発をヨーロッパ中世の始まりと設定し」（21）
↓
５世紀から１５世紀
１６・１７世紀：中世から近代への移行期（近世）→古プロテスタンティズム
１８世紀から：近代 →　新プロテスタンティズム（トレルチ）
・「宗教改革」を中世と近代の移行において捉える。
・サブシステム間の時差
・地域と伝統の多様性

第一章　小国家の時代
第二章　中世ヨーロッパ・システムの生成と展開
居住空間、交換（商業）、法・社会秩序、封建制、騎士・傭兵
第三章　統治と政治秩序の体型
帝国と王国、王権、俗権と教権
第四章　碧き血統
貴族、身分制
第五章　規律と恩寵
禁欲、修道性、霊性、奇跡、異端

２．問題：中世という時代は「ヨーロッパ的なもの」の生成・現実化のプロセス
cf. 古代キリスト教の理念の変容と実現
・西欧キリスト教会の連続性と転換
ゲルマン諸民族のキリスト教化

・中世の生成と変動におけるキリスト教
　　修道院の意味
・中世を特徴付けるシステムとそこにおけるキリスト教の位置・機能
　　俗権と教権の緊張と相補性
　　スコラ的文化総合
・都市の宗教性
　　民衆と異端
・中世キリスト教思想の意義

＜ユダヤ人の運命：古代から中世へ＞

１. ユダヤ戦争以後：ローマ帝国に対する反乱は最悪の結果で終わった（殺された一般市民は 60 万人以上に及ぶとも言われる）。
　　捕虜収容所（ヤブネ）のユダヤ人による共同体再建の努力。
　　ヨハナン・ベン・ザカイ。聖書と口伝律法という指導原理の確立。ユダヤ教聖書正典の編集（90 年頃までに）
　↓
ローマ帝国の強硬な弾圧（ハドリアヌス帝）、パレスチナ・エジプト・キプロスなどの地中海東部地域のユダヤ人は激減。キリスト教に改宗したローマ皇帝の反ユダヤ政策（ローマ市民とユダヤ人の結婚の禁止）。特に分裂後東ローマ帝国。
　↓
バビロニア（ササン朝ペルシャ）へ中心が移る。
　11 世紀末：ユダヤ人の総人口 100 万台、その 90 %はイスラム圏に居住。

２. ユダヤ教（聖書とタルムード。シナゴーグ）を共有する民族としてのユダヤ人。
　エルサレム・タルムード編纂（390 年頃、ガリラヤの再建志向者）
　　正典である聖書の解釈判例集（口伝律法）を整理編集したミシュナ。
　　ミシュナの解釈集としてのタルムード
　バビロニア・タルムード編纂（490 年頃）

３. イスラム世界のユダヤ人：イスラム勃興期には、ユダヤ人の弾圧政策、次第に身分差別との引き替えに信仰の自由を認める宗教政策に転換（ユダヤ人の優秀性への着目）抑圧しつつ優遇。

４. イベリア半島のユダヤ人：キリスト教への改宗の強制＝マラノと呼ばれ差別。
　サラセン帝国下での寛容政策によりマラノの多くはユダヤ教に復帰。
　　スファラド（ヘブライ語でスペインの意味）系ユダヤ人の成立。
　　11 世紀から 12 世紀：スペインのユダヤ文化の黄金時代。
　↓
イベリア半島のキリスト教化（レコンキスタ）
　13 世紀の迫害（スペイン帝国での異端審問のための宗教裁判所の設置）で、多くのユダヤ人は再度マラノになるか、国外へ追放。

５. ヨーロッパ北部（アルプスの北側）のユダヤ人：アシュケナージ系ユダヤ人。
　西ローマ帝国（ローマを中心としたカトリック文化圏）においても、ユダヤ人への反感は存在していたが、東ローマ帝国におけるような迫害はなく、世俗君主もユダヤ人を優遇。（フランク王国のカール大帝・シャルルマーニュは、文化振興策

としてバビロニアからユダヤ人学者を招いて学院を創設。8 ～ 9 世紀）

↓

10 世紀から 11 世紀にかけての転換。抑圧の強化。十字軍（11 ～ 13 世紀）の影響。

1215 年の第四回ラテラノ公会議で、ユダヤ人抑圧の基本路線が打ち出される。

ユダヤ人とキリスト教徒の結婚の禁止（特別なしるしをつけた服装の強制）

職業組合からの締め出し→金融業

聖体冒涜（聖餐式用のパンを盗みだし拷問台にかけている）のデマ

ペスト大流行（1348 ～ 50 年）でのデマ（井戸の毒を入れている）

↓

ユダヤ人差別の定着（16 世紀にはゲットーの設置）

アシュケナージ系ユダヤ人の追放。東ヨーロッパ（ホーランド、リトアニア、ラトビアなど）へ。

6．中世のユダヤ思想としての神秘主義・カバラ

迫害と差別・抑圧の中で、伝統的な宗教を守る道　→　内的な心の自由

絶望的な状況下で、内的な神秘体験の中に究極的な希望を見いだした。黙示文学の神秘思想の系譜。

↓

カバラ（＝「伝承によって受け継がれたもの」）神秘主義。

『セーフェル・ハゾーハル』（光輝の書）、イツハク・ルーリア（16 世紀）

↓

後のハシディズム運動を生み出す。

＜参考文献＞


1．荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。

2．石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。

3．市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。

4．ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局。

5．マルティン・ブーバー『ハシディズム』みすず書房。